



■雨が好きです

6月になりました。これから雨の日も多くなると予想されますが、ここのところは好天続きで梅雨入りはまだまだ先のように感じられます。雨は、時に災害をもたらす恐ろしいものではありませんが、農耕民族にとっては作物の実りという恵みをもたらすものでもあります。モンスーンアジアに位置し温暖湿潤気候が大半を占める日本は、年降水量が多く梅雨や秋の長雨の時期をはじめ雨の日が多くあります。そんな日常を過ごしてきた日本人にとっては、雨の降らない晴れの日が何か特別な日に感じられたのではないのでしょうか。晴れた日は心躍る気持ちになり、まさに心晴れ晴れとした「ハレ」の日という気持ちになるものです。ご近所同士の挨拶でも仕事上の会話でも、まずは天気の話から入ることが多いですね。天気の話が長すぎて本題を忘れてしまうこともあります。

歌手の中島みゆきは、自身が作詞作曲した楽曲『明日天気になれ』で「何ンにつけ一応は絶望的観測をするのが癖です（中略）雨が好きです 雨が好きです あした天気になれ」と歌っています。しかし、雨が好きなわけではありません。本当は晴れてほしいけれど、その願いが叶わなかった時の残念な気持ちに向き合いたくないため、心理的予防線を張り“何ンにつけ一応は絶望的観測”をしておくことによって、自身の心が傷つかないように、あえて逆のことを言っているわけです。リスクマネジメント（危機管理）においては“常に最悪を想定して”前掛かりで対策を講じる必要がありますが、ここでいう“絶望的観測”とは自身の心の働きへの後ろ向きな対策といえるかもしれません。2番の歌詞では「宝くじを買うときは 当たるはずなどないと言いながら買います そのくせかつて誰かが 一等賞をもらった店で買うんです はずれた時は 当たり前だときかれる前から 笑ってみせます」と歌っています。本心では当たって欲しいと願っているわけですが、その気持ちを悟られたくないという思いが込められているのです。

人は、願えば願うほど、その思いが強ければ強いほど、逆の結果に終わった時の落胆は大きくなります。スポーツ観戦の際に、^{ひいき}贖するチームの勝利を願えば願うほど負けた時のショックは大きくなりますよね。しかし、自分の気持ちに偽ることなく声援を送り、勝利したときには嬉しい思いに、負けた時には悔しい思いに直面し、その感情を受け入れ乗り越えていくことで一回り成長した自分に出会えるのではないのでしょうか。家族や友人に対する応援だったら、喜びや悲しみを共有することで一層強い絆も生まれるはずですよ。

あらゆることに対して一定の距離を保ちながら深く関わろうとせず常に評論家のように対応するクールな姿勢ではなく、時に熱い気持ちを持って物事に関わることは自分自身の殻を破る契機になるかもしれません。結果を恐れず、自分の気持ちに正直に向き合うことも必要です。その先に、共感してくれる他者の存在も見えてくるのではないのでしょうか。

ところで、最近本当に（笑）「雨が好きです」という方に出会いました。ALTのカーソン先生です。彼の出身地であるアメリカ・アリゾナ州は乾燥地帯に位置し、雨が非常に少ない地域となっています。乾燥地帯においては、雨は大地に潤いを与え、そこに暮らす動植物に恵みをもたらすものです。彼にとって「雨が好きです」は、“希望的観測”なんですね。